スタッフルーム
Staff room

私を貫くもの

手島（てじま）　善人（よしと）
（三田メディアセンター）

振り返れば，ジャズに興味を持ったきっかけは反抗心だった。当時中学生，まさしく反抗期にあった私は，それまで続けてきたクラシックピアノに嫌気がさしていた。その理由は，楽譜に書かれている以上の表現するにあたり，作曲者のキャリアや作曲時の環境に想いを馳せるよう指導を受ける中で，自由な発想を求められつつも，あたかもそこには模範的な正解があり，それを再現するよう迫られている感覚に苛まれていたからである。

それまでジャズに対しては，漠然と「洒落ている」程度の印象しかなかった。しかし，クラシックへの反抗心が芽生える折，何とはなしにYouTubeがサジェストした，Roy HargroveによるStrasbourg St. Denisのライブ映像は，私の音楽観を変えた。その演奏は冷静ながらもエネルギーに満ち溢れ，そして何より彼らは音楽を心底楽しんでいた。ジャズのことが何もわからない中学生にとっても，それが前提にある「正解」をなぞるのではなく，何か別のものを希求していることは自明だった。

この出会いを機会に次第にジャズに傾倒するようになり，クラシックピアノからジャズピアノに転向した。さらには吹奏楽部に入りバストロンボーンを担当し，部内のビッグバンド等でジャズに触れた。そして卒業後は慶應義塾大学のジャズサークルに参加し，主に2010年代以降の現代ジャズラージアンサンブルを中心に演奏活動を行った。本筋からは逸れるが，この経験が採用面接では何かと話題の種となったこともあり，サークルには感謝が尽きない。

さて，単にジャズといっても内実は様々な形態・音楽のタイプがあるが，いずれも共通する点は即興性であろう。アドリブ，インプロヴィゼーションとも呼ばれるこの特徴はジャズに限ったことではないが，他のジャンルと比べればその重みはひとしおである。

しかし殊に複数人のステージにおいて，即興で演奏するとはどういうことか。無論，個々人が好き勝手に音を出しているわけではなく，大きく分けて２つのポイントがある。１つはメロディについて。ジャンル，リズム，コード進行，テンポ，楽器の音域・特性など一定の制約の中で，自分のアイディアに基づきメロディを紡いでいく。

一方で，一音一音とは別に全体の構成についても意識しなければならない。はじめから最高潮のテンションでは聴衆も辟易してしまうし，反対に盛り上がりに欠ければ煮え切らない印象となってしまう。

構成を組み立てていく中で重要なのは，時を同じくするバンドメンバーの存在である。メインプレイヤーとその他メンバーのテンションが乖離していれば，その演奏はぎこちないものとなる。反対にボルテージを同じくして展開していけば，各々の演奏は互いにエンハンスされ，決して１人では醸せない高揚を誘う。

実際の演奏にあっては，プレイヤー同士でコミュニケーションが緊密に取られている。個々が出す音はもとより，アイコンタクトやハンドサイン，表情までそのチャネルは多岐に渡る。ステージの上で言葉無くして，時に助け合い，焚き付け，煽り，闘うのである。

転向直後，師からまず教わったことは，「何を演奏するかではなく，何を聴くかが先立つようにすること。耳を鍛えなさい」ということだった。今なら左記の動画の何に心を動かされたかわかる。即興演奏と音を介したコミュニケーションが作り出す雰囲気全体を感じ取ったのだ。

しばしばジャズは言語さながらだと思い至る。コード進行という文法の上で，フレーズという語彙で話す。その言語圏でプレイヤーが会話（それはおしゃべりだったり，討論だったり喧嘩だったりする）をし，相互により刺激的な演奏を求めて協働すること。レジェンドのレコーディングを聞いて会話を紐解いたり，ライブに足を運び聴衆としてリアルタイムで会話に参加すること。毎回どんな会話（演奏）になるかわからない。一言一句の再現をするつもりもない。私はそこに陶酔すら覚えるのである。